

# ラムサール条約

# 湿地の保全と賢明な利用を進める条約です

## ラムサール条約とは

1971年、イランのカスピ海湖畔の町ラムサールで、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」が採択されました。これが「ラムサール条約」です。

現在、世界で159ヶ国が加入しています（平成21年8月末現在）。日本は、1980年にラムサール条約に加入しました。

**保全・再生** 水鳥の生息地としてだけでなく、私たちの生活環境を支える重要な生態系として、幅広く湿地の保全・再生を呼びかけています。

**賢明な利用** ラムサール条約では、産業や地域の人々の生活とバランスのとれた保全を進めるために、湿地の「賢明な利用（wise use:ワイズユース）」を提唱しています。賢明な利用とは、湿地の生態系を維持しつつ、そこから得られる恵みを持続的に活用することです。

**交流・学習** ラムサール条約では、湿地の保全や賢明な利用のために、広報、教育、参加、普及啓発活動（CEPA—Communication, Education, Participation and Awareness—）を進めることを決議しています。



## ラムサール条約湿地とは

条約に加入する国々は、自国の湿地を条約で定められた国際的な基準にそって「国際的に重要な湿地に係る登録簿」に登録します。これがいわゆる「ラムサール条約湿地」です。

ラムサール条約では、沼沢地、湿原、泥炭地または陸水域、および水深が6メートルを超えない海域などを、湿地と定義しています。その中には、水田、ため池、水路、ダム湖、汽水湖、河川、遊水池、塩性湿地、湧水池、地下水系、カルスト台地、ツンドラ、マングローブ林、干潟、藻場、サンゴ礁などが含まれます。

世界には、1,847ヶ所のラムサール条約湿地があります。  
(平成21年8月末現在)

国際的な基準は次のとおり定められています。

- 基準1：特定の生物地理区を代表するタイプや固有のタイプの湿地、または希少なタイプの湿地。
  - 基準2：絶滅のおそれのある種や群集を支えている湿地。
  - 基準3：生物地理区における生物多様性の維持に重要な動植物を支えている湿地。
  - 基準4：動植物のライフサイクルの重要な段階を支えている湿地。または悪条件の期間中に動植物の避難場所となる湿地。
  - 基準5：定期的に2万羽以上の水鳥を支える湿地。
  - 基準6：水鳥の1種または1亜種の個体群で、個体数の1%以上を定期的に支えている湿地。
  - 基準7：固有な魚類の亜種、種、科の相当な割合を支えている湿地。また湿地というものの価値を代表するような、魚類の生活史の諸段階や、種間相互作用、個体群を支え、それによって世界の生物多様性に貢献するような湿地。
  - 基準8：魚類の食物源、産卵場、稚魚の生育場として重要な湿地。あるいは湿地内外における漁業資源の重要な回遊経路となっている湿地
  - 基準9：鳥類以外の湿地に依存する動物の種または亜種の個体群で、個体数の1%以上を定期的に支えている湿地。
- 注) 魚類：魚、エビ・カニ・貝類

## 日本での登録条件とは

日本は、次の条件を満たしている湿地を登録しています。

1. 国際的に重要な湿地であること（上記9つの基準のいずれかに該当すること）
2. 国の法律（自然公園法、鳥獣保護法など）により、将来にわたって、自然環境の保全が図られること
3. 地元住民などの登録への賛意が得られること

■ 日本で既に登録されているラムサール条約湿地は全国で37ヶ所です。（平成21年8月末現在）